

Title	福沢諭吉とH・スペンサー『第一原理』： 第二部第一・二・三章を読む
Sub Title	Yukichi Fukuzawa and Herbert Spencer's philosophy
Author	安西, 敏三(Anzai, Toshimitsu)
Publisher	慶應義塾大学法学会
Publication year	1994
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.67, No.12 (1994. 12) ,p.225- 245
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	内山秀夫教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19941228-0225

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福沢諭吉とH・スペンサー『第一原理』

—— 第二部第一・二・三章を読む ——

安 西 敏 三

- 一 まえがき
- 二 哲学と科学
- 三 物理哲学
- 四 あとがき

一 まえがき

「今や誰もスペンサーを科学者であつたとは思わない。彼は思想のセールスマンであつたが今や誰もその商品を好まない」⁽¹⁾(C・プリントン)。これが十九世紀から二十世紀にかけての日本の、否世界の知的世界を風靡した一思想家の一世紀後の評価である。スペンサー(Herbert Spencer, 1820～1903)の思想が我が国に紹介されたのは、通常、明治十(一八七七)年前後とされ、取り分け十年代はその邦訳が集中しており、同時期のミルやベンサムのそれに比して圧倒しており、自由民権運動のバイブルとされたり、あるいは明治政府のブレーンの存在にされたり、はたまた慶應義塾や東

京大学などアカデミズムの世界にあっても教科書として取り上げられたりして、その広まりの大きさは、ブリントンの評価が逆説的にも真実であることを示して余りある。⁽²⁾

ところで本稿は、これまで指摘されながらも十分な研究がされてこなかったスペンサー摂取の先駆けとも言える福沢諭吉(一八三五―一九〇二年)のスペンサー、その『綜合哲学体系』(System of Synthetic Philosophy)の序論的基礎となる『第一原理』第二部(First Principles of a New System of Philosophy, 2nd. ed., D. Appleton, N. Y., 1875, Part II)即ち「可知界」(THE KNOWABLE)の最初の三章における着眼点を、そのノートを紹介することによって文字通り瞥見しようとするものである。⁽³⁾

福沢は我が国におけるスペンサー熱の起こる明治十年代以前、即ち既に明治八(一八七五)年五月十三日から十ヶ月余りを費やして『社会学研究』を読了し(明治九年三月十四日)、途中J・Sミルの『功利主義』(Utilitarianism, fifth ed., Longman, London, 1874)を二週間余り(明治九年四月四日―十四日、再読二十日)で読み終え、⁽⁴⁾同年五月十日から一年あまりを費やして『第一原理』を読了している(明治十年六月二十三日)。ただ福沢におけるスペンサー的視点は既に『学問のすゝめ』第四編「学者の職分を論ず」(明治七年一月刊)においてスペンサーの平衡(EQUILIBRATION)説を想起させる「力の平均」論を唱え、説明手段として社会有機体説を援用しているから、⁽⁵⁾少なくとも明治六年の段階で何らかの形でスペンサーの説に接していたと思われる。それは、明六社同人の森有礼がアメリカ滞在中にミルやトクヴィルとともに熱心にスペンサーを学んでいたこと、⁽⁷⁾さらに第四編が森からの教示をも考慮して執筆されたことから――従って森はこの論説に礼讃を惜しまなかった――あるいは森、さらにはすでに国家有機体説を学んでいた加藤弘之らの議論からくる可能性がある。⁽⁸⁾また『文明論之概略』(明治八年四月頃脱稿)における報国心を偏頗心としているところは愛国心を“bias”(偏見——福沢の『学者安心論』における訳では「心情の偏重」)⁽¹⁰⁾としているスペンサー『社会学研究』を参考としている可能性なきもあらずであるが、これも明示できないが故に宿題と化す。⁽¹¹⁾こうした福沢が直接スペンサ

1の著作を繙く以前の福沢におけるスペンサーなるものについては両者の考証研究を待つほかない。

二 哲学と科学

スペンサーは『第一原理』第一部の不可知界に引き続いて第二部として可知界について議論するが、まず哲学の定義から始め、その歴史について論ずる。彼は「現象」(Appearance)と区別された「存在」(Being)を定式化する(formulate)ことが哲学にとって不可能であるならば、哲学とは本当のところ一体何なのかと説くが、ここに波状のサイドラインが引かれてある。福沢はこのスペンサーの言う「存在」について第一部で論じた宗教と科学との一致点としての「絶対存在」(the Absolute Being)という前提に疑問を付して「ビーイングトハヨカシイ」⁽¹³⁾と疑問を呈しているが、ここには福沢のみならず徳川期儒学、なかでも宋学的認識論を、その批判を通したものであれ、あるいは自ら批判するにしろ、何らかの形で学んでいる者にとって、「存在」と「現象」との関係は、太極論との関係で興味深く思われたに違いない。スペンサーが「存在」を「現象」と把握できないなら哲学の存在理由がなくなると論じていることは、それだけ陰陽五行論を批判し、五感の働きに訴える自然法則の認識をもたらす「実学」提唱者としての福沢には感じる⁽¹⁵⁾ところがあったのであろう。

また哲学の本質についての過去及び現在の考えはそのいづれをとってもすべてが誤まりではなく、そこに見られる真理は一致するとそれとなく示している、とのスペンサーの議論にやはりサイドラインがみられる。⁽¹⁶⁾その本質をどこに求めるかによるであろうが、哲学の普遍的共通性の有無についての確認とそれは思われる。

次いで哲学史の叙述では「Greeks」と書き込み、「『変化する状態(variable state)を起こす変化しない存在(invariable existence)とは何なのか』との問いに答えて曰く、水(Water)、空気(Air)、火(Fire)が即ちそれである」にサイド

ラインが引かれてあるが、これにはギリシア哲学と福沢が批判して止まない陰陽五行(木・火・土・金・水——但し福沢は空・風・地・水・火としている)⁽¹⁸⁾論との比較の意味があったのではないかと想像される。陰陽に地と風が加われば、福沢の認識からして、それこそギリシア哲学は中国古代哲学、なかでも鄒衍^{すうえん}に端を発する万物生成論になるからである。その次には「Pythagoras」と書き込まれ、事物の物質的存在の原因として「数」(Number)をあげているところの、その「数」にアンダーラインが引かれてある。⁽¹⁹⁾「数」と「理」とを自然の原則に求め、「人間万事有形の経営は都てソレカラ割出して行きたい」との教育主義をとっている福沢にすれば、ピタゴラスの数論哲学に興味を覚えても不思議ではない。

かかる宇宙論の究極的説明として哲学はやがて限定をみ、ソクラテスやストア、あるいはゼノンがでた。これらの哲学は「行為の原則」(principles of action)を意味づけるようになった、とスペンサーは言う。福沢はここに「Socrates」と書き込み、さらに「Stoics」と書き込み、“the doctrine of right living”⁽²²⁾にアンダーラインを引いた。正しい生き方をめぐる教えがソクラテス派やストア派の哲学の根本であることに着眼しているのである。また「Zeno」とも書き込んでいる。⁽²³⁾そうしてこれらの哲学は多少なりとも宗教的拘束を受ける時間とか、人間の在り方、あるいは特殊な場合に関係なく説かれた原理であるとの説明に着眼し、これらの観念のうち不変の要素は、「事物と行為の表層」(the surfaces of things and actions)が示す「雑多で詳細な真理」(the multitudinous detailed truths)と区別された「広くかつ深い真理」(wide and deep truths)を求める、と述べられているところにサイドラインを福沢は引く。⁽²⁴⁾哲学の探求領域の限定化がそれだけより深い真理をもたらしたと始めたことへのそれは着眼であって、万物を陰陽五行論よろしく解釈する粗雑な真理探求方法(?)への福沢の批判の現れとこれは解釈しうる。

こうして福沢はスペンサーを通してギリシア哲学を理解するが、今度はイギリスとドイツの哲学についての議論に着眼する。そこにはやはり「England」「German」との書き込みがあり、⁽²⁵⁾英独両哲学ともその言葉に「非体系的知識」

(unsystematized knowledge)を意味するものとして使わない。たとえすべてに互って詳細な検討がなされていようと、もその間に何らかの体系的性が無かったら哲学とはいわない、との要約にサイドラインがある。⁽²⁶⁾ スペンサーにとって哲学と体系的性は不可分だからである。次いでイギリスに「自然哲学」(Natural Philosophy)が起こり、その発達したものととして「実証哲学」(Positive Philosophy)が生まれたことを述べ、両者の比較を通して、哲学のあいまいな観念はより限定され明確になる、と「実証哲学」の祖コントに触れながらスペンサーは論じる。この欄外に「Conte」との書き込みがあり、「自然哲学」と「実証哲学」のところにアンダーラインがある。⁽²⁷⁾ そうして哲学の区分を相互ないし全体と対照しても哲学は同じ意味を含むとして「道徳哲学」(Moral Philosophy)と「政治哲学」(Political Philosophy)の例をだす。そしてその論証と結論の内容が豊かであることにおいて少なくとも両者は哲学と一致する、とスペンサーは述べる。ここにサイドラインが引かれてある。⁽²⁸⁾ またこの頁には赤の不審紙が挟まれてある。

また哲学は、「機械的に記憶に集積された」(mechanically accumulated in memory)あるいは「百家全書的に積み上げられた」(heaped up in cyclopaedians)単なる経験知よりもあらゆる点において事物を認識しうるとの信念を含んでいる、とスペンサーは論ずるが、ここにサイドラインがある。⁽²⁹⁾ そして哲学の概念で共通する要素は「一般原則についての最も高度な知識」(knowledge of the highest degree of generality)であるとしているが、ここにもサイドラインがある。⁽³⁰⁾

ところで哲学の範囲をこのように狭く限定して行くと、次に科学との関係に突き当たるとスペンサーは述べる。「知性の範囲」(The range of intelligence)は「相対的」(the relative)で、「力」(Power)を感じるといえども「力」の本質について何物かを学ぼうとすることは無益である。哲学についてもそれに属すと考えられているものを取り除くことによってその領域を限定したが、残った領域は科学の占めるところである。科学は現象間の「共存と系列」(the co-existences and sequences)に関係し、まず現象を単一ないし最小限度にまで「一般化」(generalizations)して寄せ集め、次第

に高度により広がりをもった「一般化」となっていくものであるが、それでは哲学にはいかなる「主題」(subject-matter)が残るのであるのか、ということになる——ここにサイドラインがある⁽³¹⁾。

そうしてスペンサーは答える形で、哲学は依然として最も高度な一般原則についての知識としての「称号」(the title)であるが、科学は単なる「諸科学の一群」(the family of the Sciences)を意味するにすぎないと述べる。このところに「Science」この書き込みがある⁽³²⁾。ここから福沢は哲学と科学の関係いかんの問題を考えている事が分かる。そうしてスペンサーに倣って科学についての性質を確認して、その学科目を次にメモしていく。

最初は、川の水の流れと石の落下とは同じ力による如く、流動体と固体を支配する力は同じ運動法則にある、という問題は科学の範囲であると論じているところに「Physics」と書き込む。スペンサーがこゝで「Physics」について説明を付しているのではない。福沢が力学の説明を受けて、それを「物理学」とみなしたのである。次いでスペンサーが例を出すのは、鳥類と哺乳類をみて空気を呼吸する動物は熱血動物であるが、同じ空気を呼吸するといっても爬虫類は生活環境である空気よりも熱を持たない。だとすれば呼吸する空気の量に体温は比例するであろうか。しかし大魚の体温は水温より高い。これは体温が血液の酸素処理の度合いによって変化するということになり、空気の量に体温は比例するとの一般原則を訂正するはめになる。かくして熱量と分子変化は関係すると主張するに至る。このように科学的真理はより広くより完全になっていくが、それはどこまでも科学に留まるとスペンサーは主張する。ここにやはり原文にない「Zoology」と福沢は書き込む⁽³³⁾。「動物学」の例として福沢はここを見ているのである。

さらに今度は話題が変わって需要が供給を上回るとき物価は上昇する、商品は在庫が多いところから少ないところに流れる、あるいは地方の産業は主としてその地方の地の利によって決まる、といった経済学の一般原則を研究する結果、社会は最小の努力で以てその欲望を充足させるとの真理に達するが、これもやはり科学の命題を扱っているにすぎない、とスペンサーは論ずる。福沢はここに「Political Economy」とやはり書き込む⁽³⁴⁾。ここでは経済学の話とし

て原文にある「経済学」をそのまま欄外に書き込んでいる。

次いでスペンサーはそれでは哲学は如何なる性質をもつのかと議論を進める。この哲学の本質についてのまとめにサイドラインが引かれ、「Philosophy」この書き込みが見られる。⁽³⁵⁾つまり様々な真理が離れ離れになって、独立しているものと見做されている限り、それらが如何に一般的原则を持っているとしてもそれは哲学ではない。その各々が機械的な公理とか、分子的物理学とか、あるいは社会的行為の法則とかに導かれた後に、これらを「ある究極の真理の系」(corollaries of some ultimate truth)として考察するとき、哲学の固有性と呼び得るようになる。哲学の真理は従って科学の最高の真理がその下にある科学の真理が持つと同じ関係を科学との間に持つのである。哲学の一般原則は科学の最高の一般原則を包括して統合することである。哲学は粗末な観察の隗集から始まって、次第により広い、また特殊の事態と、より離れた命題を確定して行き、普遍的命題に帰着する過程の最終段階の所産である。あるいは「最少種類の知識は一体化されざる知識であり、科学は部分的に一体化された知識であり、哲学は完全に一体化された知識である」。⁽³⁶⁾この箇所にはさらにアンダーラインがある。

福沢はこのようにスペンサーの哲学と科学との区分を認識しても、「実学」、即ち科学(science)を最後まで主張することはあっても哲学をすすめる主張することはなかった。それでは福沢はスペンサーの言う哲学を全く無視し、ここでのノートも単なるメモのためであったか、と言うと無論そうではないであろう。福沢がスペンサーの書を読み、その物理学的有機体説を認識し、学問には「縁」——福沢の第一部における書き込みの用語を引き合いにだすならば「事物ノリレーション」⁽³⁷⁾——という「関係」を知らなければならないとして、この「関係」に学問営為のアクセントをおき始めていることと恐らくそれは関係するであろう。スペンサーの総合哲学にとって正に「関係」の認識は、その有機体説との関係においても不可分なのである。ここから福沢は一体化された知識としての、即ちスペンサーの言う哲学の意義について、哲学という名辞こそ使用しないが力説しているといつてよい。即ち「学問の要は唯物事の互に関

り合う縁を知るに在るのみ」⁽³⁸⁾がそれである。これはさらに次節においても確認されよう。

またスペンサーは哲学を一般哲学と特殊哲学に区分し、前者が普遍的真理の説明のために使用され、後者が普遍的真理から説き明かされる個別的真理の説明のために使用されると述べて、ここでは一般哲学について論じるとしているが、ここにサイドラインが引かれ、「*General & Specific Philosophy*」と書き込まれ、福沢の着眼の跡が窺われる。⁽³⁹⁾

このように問題の限定を行ってスペンサーは「哲学の基礎」(THE DATA OF PHILOSOPHY)について論じ始める。この第二章の冒頭には不審紙が貼付されているが、スペンサーのいう「すべての思想は諸々の思想の全体系(a whole system of thoughts)であって、各々の相関関係を断つならば、その思想は消滅する」との思想の条件に福沢は留意したと思われる。それは先に触れたように学問には「縁」が必要であり、それなくしてはいわゆる「論語読みの論語知らず」⁽⁴¹⁾ならぬ「飯を食う字引」と化すからである。

そうして思索のプロセスにとって本質的である根本的直観、即ち仮説が一時的に疑いのないものと解釈されるとしても、その仮説は結果によって検証されて始めて正当化されなければならない、とのスペンサーの論に福沢は注目したのであろう。スペンサーがその具体例として、ある特定の色と光沢を放つ塊が金と呼ばれるが、その物質が金であることを証明することによってその仮説を検証するプロセスについて論じているところに「gold」と記され、サイドラインが引かれてある。⁽⁴²⁾即ち金についてわれわれはさしあたりのある印象をもっている。そうしてわれわれはある特定の塊がある特定の条件の下で、われわれにその印象を与えるか否かについて考える。ところでわれわれはまた金が最大の比重を持つ金属であることを知っている。そこでこの塊を手にとってその重さが大きな割には重いとなると、念頭にある金の印象と現前にある塊の印象とが一致することになり、この塊が金であることが分かり、これは一つの証拠となる。また金は他の多くの金属と異なり硝酸に溶けないことをわれわれは知っているので黄色の光沢のある重い物質に硝酸を一滴落としても腐食しないはずであると考える。そして実際に硝酸を一滴落としても何らその物

質に変化が起らないとなるとそれが金であることを知る。これもまた一つの証拠となる。また金の可鍛性についての知識がその実験をすることによって、それが充分あるとなると、それがまた金であることの証拠となる。こうして正確を期しての検証がわれわれの知識を活かすことによって可能である。これは金についての知識が一定の条件の下で現れた、一定の關係に立っている一連の印象についての一定の意識に外ならないことを示している。従つてもし現在の経験において、「印象」(impression)、「關係」(relations)、「条件」(conditions)が過去の経験におけるのと完全に一致するならば、その「認識」(cognition)は完全な「正当性」(the validity)を持つことになる。仮説は、われわれが認識行為においてその時々を理解する簡単なものをも含めてそれをなす意識状態と、「知覚」(perceptions)ないし「反省」(reflections)、あるいはこれら兩者に示されているある別の意識状態との一致を見て始めて立証されるのであり、この「一致」(congruities)の意識、あるいはそうではなくて「相互の關係が一致しない」(correlative incongruities)意識のいずれかにより成り立つ以外に認識は存在しないのである。

スペンサーにとって真理の探求方法はこのような手続きによるものであつて、仮説と検証を繰り返すことからくる一致ないし不一致の意識以外のものは認識外なのである。これが哲学するうえでの基礎であり、スペンサーのいわば認識哲学である。こうした基本的要件についての議論のところに不審紙が貼付されていることから分かるように福沢はその認識哲学に着眼している。この方法的手続きが『社会学研究』で論じている「抽象的・具體的科學」(the abstract-concrete Sciences)の最もよくなし得ることはスペンサーが金の化学的実験による検証でもつてその認識哲学を説明していることから判断できよう。かくして福沢がこの認識哲学に対して哲学よりもむしろ学問方法論として把握しているであろうことはこれ以上の説明を要しない。そうしてスペンサーは今度は意識の問題についての議論に入る。経験上われわれは「明確表示」(manifestations of the vivid order)のほうに「曖昧表示」(manifestations of the faint order)よりも先行することを知っている、あるいは觀念は最初の印象の不完全にして微弱なものの反復であるが――

ここに不審紙貼付がある⁽⁴⁴⁾、前者の特性を独立とし後者のそれを依存とする。しかも両者は「異質な流れ」(heterogeneous streams)——この用語にアンダーラインあり⁽⁴⁵⁾——であって、それぞれ広くなったり狭くなったりして、あるいは抹殺しようと脅したり、脅かされたりして、しかも何れも排除されることなく、たがいに並んで走る。この説明箇所⁽⁴⁶⁾にサイドラインが引かれてある。そうしてスペンサーは活動しているときは「明確表示」が優越しているが、それでも「曖昧表示」が無いのではなく付随的に存在するという。福沢がサイドラインを引いて着眼するのは、目を閉じたときの例である——ここには「Dream」と書き込まれている⁽⁴⁷⁾。即ち圧力や音などの「明確表示」が微弱となるよう目を閉じると、相対的に「曖昧表示」が有力になり、「明確表示」の流れは殆ど排除されるかの如き存在と化すが、意識が存続しているあいだは圧力や感触は消え去ることはないものであって、眠っているときのように意識の無い状態においてのみそれは言える。その場合、「明確表示」が「曖昧表示」と見なされる誤解が生じる。それはただ目覚めて「明確表示」が現れるまで分らないだけの話であって、その間の事情は認識できないのである。

こうしてスペンサーはさらに「経線的結合」(longitudinal cohesion)と「緯線的結合」(lateral cohesion)——この二つの用語にアンダーラインがある⁽⁴⁸⁾——がそれぞれの表示にはあると述べ、しかも二種類の結合には目立った相違があるとする。そしていわゆる視界をなすものとして光と影と色と輪郭が客体なるものを形作るという。このところにサイドラインが引かれてある⁽⁴⁹⁾。そうである以上はこれらの結合を分離してみることができないが、これは「明確表示」においていえるのであって、「曖昧表示」はそうではない、とスペンサーは説明する。圧力が曖昧な場合、そこに微弱な兆しがあるとしても、その特別な微弱の表示の広がりや圧力の特別な「曖昧表示」で結合することは無いからである。ここにサイドラインが引かれてある⁽⁵⁰⁾。従って明確な種類については個別的なものが不可分的に結合しているのに対して、曖昧な種類についてはそうではなく、大部分が緩く集合しているにすぎなく、例外はその特定の属の間のみである、とスペンサーは論ずる。

こうしてスペンサーは「曖昧表示」から主体、即ち自我を、「明確表示」から客体、即ち非自我を引き出すのであるが、福沢のノートはそこにはない。哲学の基礎といえども福沢にとって認識にかかわる心理学は、科学の事例によるそれと違っておそらくあまり興味が沸かなかったこと、このことがここに現れているように思われる。そうして、これは以下に見られる物理的事例におけるノートの多さとの比較からも分かる。次にそれを見てみよう。

三 物理哲学

スペンサーは「空間」(SPACE)、「時間」(TIME)、「物質」(MATTER)、「運動」(MOTION)、「それ」に「力」(FORCE)の諸概念についての議論を第三章で展開するが、これは次章以下において展開する物理的、さらに言えば力学的宇宙論の序言に相当する。福沢はこの主題に着眼して第三章の冒頭部に不審紙を貼付する。さらに哲学の批判が通常懷疑的精神を生むといわれるが、それは誤解であるとして、形而上学を読むときは全て妄想であるとの感じを味わうが——この趣旨の文の原文にアンダーラインがある——⁽³¹⁾それは結論に近づくに従って強くなるけれども、言語が正当に解釈されるならば妄想は生まれないとスペンサーは述べる。スペンサーが本質的に信用しない「夢のごとき観念論」(dreamlike idealism)——ここにアンダーラインがある⁽³²⁾——も起こらないはずであるが、言語に誤解がつきものである以上はそれも多少は起こると言う。もし現象とか外見が人を誤らせることがないならば、心の混乱は極めて少ないけれども、これらの用語に代わるに結果という用語を用いるならば、それはいかなる感覚を通しても意識に生み出される印象として等しく適用でき、相関的原因を思想において納得させるから、「観念論的狂乱」(the insanities of idealism)——ここにアンダーラインがあり、このスペンサーの説明にサイドラインがある——に陥ることはない⁽³³⁾。

さらに誤解を生むものはその他の言語上の訂正によって消える。より真に現実に向かうとして認識せんとし、創造

する実体との対比でみるならば、われわれはただ知りうる現象的存在の外見的非現実を増やすのみである——ここにサイドラインがある⁽⁵⁴⁾。

結局スペンサーにとってリアルの意味は如何なるものであるかが問題となる。福沢はこうした議論にさらにサイドラインやアンダーラインを引き理解に努めるが、抽象的議論が多いのか、要約とか感想の具体的書き込みは見られないし「覚書」へのノートもない。

スペンサーは哲学者は眞実は意識外に存在するというけれども、絶えず實在に帰す現実⁽⁵⁵⁾は意識を離れて存在する知識であると言う。また哲学者は眞実の概念は意識ある状態に過ぎなく、考察すべき問題がこの様式と他の様式との関係如何にあることを忘れていようであると述べる。ここにサイドラインがある⁽⁵⁶⁾。そうして現実⁽⁵⁵⁾は意識における継続を意味するとスペンサーは論じ、空間についての意識と同様非条件的か、あるいは体をしっかり抱き締めているときに見られる体についての意識と同様に条件的であるか何れかであると述べる。また確信する現実⁽⁵⁶⁾は単に継続についての試験によって区別される。というのはこの試験によって非現実と呼ぶものからそれを区別するからである。こうした文意のところにサイドラインがある⁽⁵⁶⁾。

ここからスペンサーは、哲学が一見排除するリアリスチックな概念を確信を以て取り入れることができるとして、そのわれわれの意識の形をとった眞実が絶対的眞実の条件的結果にすぎないとしても、非条件的原因と分かち難い関係に基づくこの条件づけられた結果は、同じく条件が持続する限り同じように持続し、これらの条件を供給する限り同じように眞実である、と述べる。持続する印象は持続する原因の持続する結果であって、実際の目的に向かっては原因そのものと同じく、これと常に同一のものとして取り扱われるのである。ここにサイドラインがあり、条件による眞実の認識について議論されているところにはさらにアンダーラインが引かれてある⁽⁵⁷⁾。ここでスペンサーは相対的眞実⁽⁵⁷⁾はありえても絶対的眞実⁽⁵⁷⁾はありえないといいたのである。そうして今度はそれを科学の觀念に応用すること

をスペンサーは試みる。

まず「関係」(relations)が思想の普遍的形式であることに触れ、関係に二種類あることを述べる。「連続の関係」(relations of sequence)と「共存の関係」(relations of co-existence)である。前者は本来的で後者は派生的である。「連続の関係」は意識の変化に存する——ここにサイドラインがある⁽⁵⁸⁾。その条件が表と裏の関係にないときは専ら連続として理解されるようになり、その条件が別の二つの方向に無関係に起こる場合は共存として理解されるようになる——ここにサイドラインがある⁽⁵⁹⁾。そうしてすべての連続の抽象が「時間」(Time)であり——この単語にアンダーラインがある⁽⁶⁰⁾——、すべての共存の抽象が「空間」(Space)である——この単語にやはりアンダーラインがある⁽⁶¹⁾——とスペンサーは述べ、時間及び空間の概念は、他の抽象が他の具体的なるものから一般化されているのと同じく一般化される——このセンテンスにアンダーラインがある⁽⁶²⁾——という。これらの場合の唯一の相違は経験の組織化が全く知性の進化によるということである——ここにもサイドラインがある⁽⁶²⁾。

そして空間意識を作る共存の位置はその言葉の意味における共存——その条件として真実を含む——ではなくて、共存の真実が無いときに背後に残存する共存の空白ともいうべき形式であり、いってみれば共存の抽象である——ここにサイドラインがある⁽⁶³⁾。ところで空間の意識が生まれる時の経験は力の経験であり、われわれが行使する筋肉の相関関係はもともと本来的にはわれわれに暴かれたそれぞれの位置の索引であって、そこに何物かが存在するということをしらせる抵抗なるものは意識的に行う圧力と同じものである。このようにいろいろな相関関係にある力の経験が空間の意識を抽象化するのである——ここにサイドラインがある⁽⁶⁴⁾。

こうして空間の概念について論じ、それが不可知の状態によって生まれるとするが、そこから生まれた「結果」(the effects)——この単語にアンダーラインがある⁽⁶⁵⁾——は斉一である。そうしてこれは時間についてもいえる述べ、スペンサーはその論証の繰り返しを避け、物質の概念について議論を進める。

物質概念は最も簡単な形に要約すれば、抵抗を生じない共存の立場にある空間概念に対する抵抗を生じる共存の立場にある概念である——ここにサイドラインとアンダーラインが引かれてある⁽⁶⁶⁾。そうして物質の究極的要素なるものは同時にその範囲と抵抗とをもつものであり、それとして抽象せざるを得ないとしての必然性がある。そしてそれは物質についての感覚経験の普通の形で以て想像上如何に微細に分けるとしても、物質の概念は超越することはできない形式となる。この二つは分離できないものであるが、抵抗のほうが第一次的であって範囲は二次的である。内容なき範囲性は空間であるが、それとの区別は抵抗によるから、これがその観念の先行性を示すというのである。ところでその抵抗は有機体の作用する抵抗の印象からのみ伝えられる。そうであるならばその意義はその抵抗の経験が空間についての概念を発生するが故に物質の抵抗の属性こそが本来的なるものであり、その空間的属性は派生的である。力の経験こそが物質の観念を築き上げるのである。「われわれの筋肉エネルギーに抵抗するものとしての物質は力の条件の下、直接に意識に現れる」——ここにアンダーラインがあり⁽⁶⁷⁾、さらに以上の説明及び以下にサイドラインが引かれてある⁽⁶⁸⁾。空間を占有するということは経験の抽象によって認識されうるもので、その本源は力の条件による。従って一定の相関関係にある力の条件によって与えられたものが物質の観念の内容を形作るのである。

相対的真実の認識がこのようなものとするならば、絶対的真実は如何にいうべきか。それについては唯原因の結果におけるが如く物質に関係するある不可知の現れである、と言い得るのみである——以上にサイドラインがある⁽⁶⁹⁾。さらに物理学、化学、あるいは他の学問において、物質を以て範囲があつて且つ抵抗する原子よりなるものと取り扱うこと、これを避ける必要はない。というのはこの概念は物質についての経験から生まれる必然の結果であり、範囲や抵抗のあるものとして、集合の概念に比しそれほど正当ではないからである。原子の仮説やこれに類似するすべてにひろがるエーテルが単位をなすという仮説は単にこれらの普遍的形態の発展であつて、それは不可知界の働きがわれわれにおいて生じた普遍的形式の必然的展開にすぎない——ここにアンダーラインがありサイドラインがある⁽⁷⁰⁾。

次に運動概念であるが、それは空間、時間、及び物質の觀念を包含するもので、ある一つの事物が知覚され、その占める位置の連鎖及び相続する位置と、思想において結合された共存の位置の一団がこの觀念の成分である、とスペンサーは述べる——ここにサイドラインがある⁽⁷¹⁾。

こうしてスペンサーは最後に究極の究極たる力の概念について検討する。空間、時間、物質、それに運動は表面的には知性の必然的基礎要件かもしれないが、さらにその心理学的分析は粗大な輪郭を示すが、それは力の経験によって構成されるか、あるいはここから抽象化されるものかを明らかにする。物質及び運動は力の別の条件的現れなのである——ここにサイドラインがある⁽⁷²⁾。また意識は変化よりなる、とのところに不審紙の貼付がある⁽⁷³⁾。そうして、すべての雑多な関係を除いて純粹の力を考察するときは、われわれは思想の相対的なことによって、否応無しに既知の力の対立物としてのある未知の力をぼんやりと考えることを拒否できない。ここには実体及び現象が同一変化の二面として、われわれは後者を以て前者より真実ならざるものとみなすことはできないが、その二面という根源的な関係において現れるのである——ここにサイドラインがある⁽⁷⁴⁾。

こうしてスペンサーは科学の統一者としての哲学(Philosophy as the unifier of Science)——ここにアンダーラインがある⁽⁷⁵⁾——について論じてきたわけであるが、「われわれが現象と呼ぶ知られた結果の知らない原因」——ここにアンダーラインがある⁽⁷⁶⁾——について、さらにこれらの知られた結果のなかにおける同異、結果を主体及び客体に分割すること、これらはわれわれが考察する上での前提である、と述べて第三章を終える。

福沢が着眼してノートしているところはスペンサーの物理哲学の基本的概念についての説明箇所であるが、それに不可欠な関係概念についても着眼していることは、先にみた福沢の学問観に照らし合わせて興味深い。ここでは各論に入れないので、福沢がスペンサー哲学、なかでもその特質を結局は力の概念であること、これをこの章において学んでいることを確認するに留める。そうしてこの力の恒存が士族の力の問題として、即ち「力の変形又は力の不滅」

として応用され、『分権論』の一テーゼとなっていることは最早明らかであろう。⁽⁷⁷⁾

四 あとがき

スペンサーは「物質の不滅性」(the indestructibility of matter)「運動の惰性」(the continuity of motion)「力の恒存性」(the persistence of force)の宇宙的原理について、「進化と分解」(evolution and dissolution)をも含めてさらに議論を進めるのであるが、以上簡単にその総論的哲学をみてきたように、スペンサー哲学の基本は自然哲学というよりも物理哲学⁽⁷⁸⁾——力学的原理を中心とするものではあるが——であり、その名前の連想から一般に想像される生物哲学ではないことが理解されたであろう。福沢がその学問の範型を物理学にしている以上、様々なノートにみられた如く、スペンサー哲学に興味を抱いたとしてもかくして不思議ではない。

ところでそれでは何故にスペンサーは、取り分け我が国にあって社会科学の分野において流行したのであるうか。一つの仮説として言うことはスペンサーの物理学の宇宙論が、我が国の当時の知的世界を支配していたであろう儒学、取り分け朱子学的宇宙論に奇妙にも一致する側面があり、このことを無視しては恐らくスペンサーの流行は考えられないということである。このことを最後に指摘しておこう。⁽⁷⁹⁾

- (1) Crane Brinton, *English Political Thought in the Nineteenth Century*, Earnest Benn, London, 1949, p. 239.
- (2) 日本におけるスペンサーの受容についての一般的概説としては山下重一『スペンサーと日本近代』(御茶の水書房、一九八三年)、またその導入の特質については清水幾太郎『日本文化形態論』(サイレン社、一九三六年)参照。またスペンサーをも含めての社会進化論の特に知的世界における受容については、秋本律郎『社会進化論と有機体説——明治期における社会学の形成過程(Ⅰ)——』(『社会学年誌』、第十八号)、松本三之介『近代日本における社会進化思想』(一)(『駿河台法学』第七卷、第一号)、川合隆男『下出隼吉の日本社会学史研究——日本社会学史研究における断続と継承——』(『法学研究』第六十七卷、第

五号) 参照。イギリスでつづつ J. W. Burrow, *Evolution and Society-A Study in Victorian Social Theory*-(Cambridge University Press, 1966), 及び Greta Jones, *Social Darwinism and English Thought-The Interaction Between Biological and Social Theory*-(The Harvester Press, Sussex, 1980), アメリカでつづつ Richard Holstadter, *Social Darwinism in American Thought*-(Beacon Press, Boston, 1955), フランスでつづつ Linda L. Clark, *Social Darwinism in France*-(The University of Alabama Press, 1984), 中国でつづつ B・I・シュウォルト『中国の近代化と知識人——敵復と西洋——』平野健一郎訳(東京大学出版会、一九七八年) 参照。

(c) スペンサーの学問体系の序説的な『社会学研究』(*The Study of Sociology*, D. Appleton, N. Y., 1874) 及び『第一原理』第二部のなかでも『進化の法則』(THE LAW OF EVOLUTION)と福沢との関連につづつは拙稿「福沢におけるスペンサー問題——H. Spencer, *The Study of Sociology* 1874, 及び *First Principles of A New System of Philosophy*, 2nd. ed. 1875. との対話——」(一)・(二)・完)、『甲南法学』第三十四巻第一号、同第三・四合併号参照。またこの拙稿をも含めて本稿で取りあげていない『第一原理』第一部の「不可知界」(THE UNKNOWNABLE)や紙数の関係上本稿で紹介できなかった第二部のその他の箇所と福沢との関係などについては近刊拙著『福沢諭吉と西欧思想』(名古屋大学出版会)参照。福沢とスペンサーとの関係の指摘の研究なりエッセーについても前掲拙稿参照。

(4) 拙編訳「福沢手沢本 J. S. Mill, *Utilitarianism* 再現」(一) (二) (三)・完)、『法学研究』第五十六巻第六、七、八号) 参照。

(5) 慶應義塾編『福澤諭吉全集』第三巻(岩波書店、一九六九年)四九頁参照。以下の引用参照はこれと同じ再版全集を利用した。

(6) 福沢とトクヴィルとの関係については拙稿「福沢諭吉と A・D・トクヴィル『アメリカにおけるデモクラシー序説』」、『福沢諭吉年鑑』第六号、及び拙編訳「福沢手沢本 A. d. Tocqueville, *Democracy in America*, Tr. by H. Reeve. 再現」、『法学研究』第五十四巻第一号) 参照。

(7) 木村匡編『森先生伝』(金港堂書籍、一八九九年)六二―四頁参照。

(8) 松本三之介他編『日本近代思想大系10、学問と知識人』(岩波書店、一九八八年)一二五―七頁参照。尚、国家有機体説の我が国への導入については山田央子「ブルンチュリと近代日本政治思想——『国民』観念の成立とその受容——」(上)(下)、『東京都立大学法学会雑誌』第三十二巻第二号、第三十三巻第一号) 参照。

- (9) 『福澤諭吉全集』第四巻、一九一〇二頁参照。
- (10) 同上、二一五頁。
- (11) 丸山真男『文明論之概略』を讀む』下巻(岩波新書、一九八六年)一三五頁参照。
- (12) 福沢手沢本 Spencer, Herbert., *First Principles of A New System of Philosophy*, 1875, p. 127. 参照。以下同様。
- (13) *Ibid.*, p. 190
- (14) 宋学の宇宙論については山田慶児『朱子の自然学』(岩波書店、一九七八年)五五〇二六頁参照。尚、福沢は漢籍を大體において朱子の解釈を通して讀んだが、朱子学を徹底的に批判した荻生徂徠を日本随一世界的大漢学者として評価していた点について福沢三八「父三題」(福沢先生研究会編『父諭吉を語る』慶應通信、一九五八年、所収)六頁参照。またその思考方法において徂徠と共通する面については拙稿「福澤諭吉における認識の問題——文體・倫理・學問・歴史——」(慶應義塾大学大学院法学研究科論文集 昭和五十三年度)参照。さらに福沢の哲学の祖を荻生徂徠に求めたものとして白柳秀湖『歴史と人間』(千倉書房、一九三六年)一四五〇二九八頁参照。
- (15) 『福澤諭吉全集』第二十巻、二四六頁参照。
- (16) Spencer, *Ibid.*, p. 127
- (17) *Ibid.*, p. 128.
- (18) 前掲全集、二四六頁参照。
- (19) Spencer, *Ibid.*, p. 128.
- (20) 前掲全集、第七巻、一六七頁参照
- (21) Spencer, *Ibid.*, p. 128
- (22) *Ibid.*, p. 129.
- (23) *Ibid.*, p. 129.
- (24) *Ibid.*, p. 129.
- (25) *Ibid.*, p. 129.
- (26) *Ibid.*, p. 130.
- (27) *Ibid.*, p. 130.

- (28) Ibid., p. 130.
- (29) Ibid., p. 131.
- (30) Ibid., p. 131.
- (31) Ibid., p. 131~2.
- (32) Ibid., p. 132.
- (33) Ibid., p. 132.
- (34) Ibid., p. 133.
- (35) Ibid., p. 133~4.
- (36) “Knowledge of the lowest kind is un-unified knowledge; Science is partially-unified knowledge; Philosophy is completely-unified knowledge.” (Ibid., p. 134.)
- (37) Ibid., p. 85.
- (38) 前掲全集、四二二頁参照
- (39) Spencer, Ibid., p. 134.
- (40) Ibid., p. 135.
- (41) 前掲全集第四卷、四二二〜四二三頁参照。尚、『学問のすゝめ』第二編では、「縁」よりも「物事の道理」の認識を訴えているが（同上全集第三卷三六〜三七頁参照）、スペンサーを読むことによって、より具体的表現に変わったと思われる。
- (42) Spencer, Ibid., p. 138~9.
- (43) Ibid., p. 140.
- (44) Ibid., p. 145.
- (45) Ibid., p. 146.
- (46) Ibid., p. 146.
- (47) Ibid., pp. 146~7.
- (48) Ibid., p. 147.
- (49) Ibid., p. 147.

- (50) Ibid., p. 148.
- (51) "A sense of universal illusion ordinarily follows the reading of metaphysics;" (Ibid., p. 158.)
- (52) Ibid. p. 158.
- (53) Ibid., p. 159.
- (54) Ibid., p. 159.
- (55) Ibid. p. 160.
- (56) Ibid., p. 160.
- (57) "Though reality under the forms of our consciousness, is but a conditioned effects standing in indissoluble relation with its unconditioned cause, and being equally persistent with it so long as the conditions persist, is, to the consciousness supplying those conditions, equally real." (Ibid., p. 161~2.)
- (58) Ibid., p. 163.
- (59) Ibid., p. 163.
- (60) Ibid., p. 164.
- (61) "that our conceptions of Time and Space are generated, as other abstracts are generated from other concretes;" (Ibid., p. 164.)
- (62) Ibid., p. 164.
- (63) Ibid., p. 164.
- (64) Ibid., p. 165.
- (65) Ibid., p. 165.
- (66) "Our conception of Matter, reduced to its simplest shape, is that of co-existent positions that offer resistance; as contrasted with our conception of Space, in which the co-existent positions offer no resistance." (Ibid., p. 166.)
- (67) "Matter as opposing our muscular energies, being immediately present to consciousness in terms of force;" (Ibid., p. 167.)
- (68) Ibid., pp. 166~7.

- (69) Ibid., p. 167.
- (70) トンターレーンの箇所は “The atomic hypothesis, as well as the kindred hypothesis of an all-pervading ether consisting of molecules, is simply a necessary development of those universal forms which the actions of the Unknowable have wrought in us.” (Ibid., p. 167.) ㊦㊧㊨㊩
- (71) Ibid., p. 168.
- (72) Ibid., p. 169.
- (73) Ibid., p. 170.
- (74) Ibid., p. 170.
- (75) Ibid., p. 171.
- (76) “An Unknown Cause of the known effects which we call phenomena,” (Ibid. p. 171.)
- (77) 前掲全集、第四卷、二三三五頁参照。
- (78) スпенサーの思想を知る上で参考になるものとして、既述したもの以外では日本のもとして中島重『スペンサー』（三省堂、一九三五年）が特に有益である。また長谷川如是閑『スペンサー』（岩波書店、一九三九年）もある。またE・バーカー『イギリス政治思想IV——H・スペンサーから一九一四年——』（掘豊彦・柚正夫訳（岩波書店、一九五四年）はスペンサー進化論における物理学と生物学との関係を理解するのに有益である。最近の研究としてJ. D. Y. Peel, *Herbert Spencer-the evolution of a sociologist* (Heinemann, London, 1971) David Wiltshire, *The Social and Political Thought of Herbert Spencer* (Oxford University Press, Oxford, 1978) M. W. Taylor, *Men versus the State-Herbert Spencer and Late Victorian Individualism* (Clarendon Press, Oxford, 1992) 参照。スペンサーが不当に無視されてきた自由主義者として、その弱点を「総合的な」進化論哲学に求め、その『倫理学原理』の自由主義原理における重要性を指摘しているものとしてジョン・グレイ『自由主義』藤原保信・輪島達郎訳（昭和堂、一九九一年）五二頁がある。
- (79) 中国の方が日本よりもスペンサーの近代化にはたした役割が大きいとの指摘は、その担い手が幼少期から儒学教育を受けてつづいたことと相俟って興味深い（Gao Zengjie, “Yen Fu and Herbert Spencer” in *The Fourth Conference of The International Society for Utilitarian Studies*, August 27-29, 1994, p. 97. 参照。